

子どもの社会性とメディア接触との関連

向田久美子・酒井 厚・一色伸夫・坂元 章・菅原ますみ

1. はじめに

「テレビやテレビゲームばかりしていると、生身の人間とつきあう機会が減り、社会性が育たない」とは、一般によく言われることである。もっともらしく聞こえる言説ではあるが、テレビ視聴やゲーム使用が子どもの社会性にもたらす影響について、今のところはっきりとした知見は見出されていない。研究量が十分でないということもあるが、社会性の発達が多様な要因によって規定されている（ゆえにメディアの影響を一貫して抽出するのが難しい）ことや、社会性の概念が幅広く、認知能力や攻撃性に比べて測定するのが難しいことなども関係していると思われる（向田，2003）。

幼児を対象としたこれまでの研究では、悪影響論とは逆に、望ましい行動の発達を意図した教育番組を繰り返し見ることが社会的行動を促すことや、テレビゲームをしている幼児ほど社会性が高いといった知見が見出されている。小学生以上を対象としたテレビゲーム研究においても、単純な悪影響論は支持されておらず、むしろ社会性に良い影響をもたらす可能性が示唆されている（木村，2003）。

このように、メディア接触と社会性の発達の関連について、悪影響論を支持する研究はほとんどない。しかし、研究の絶対量が少ない現在、「悪影響はない」と言い切るのも難しいと思われる。こうした現状にあっては、丹念な縦断研究により、メディアが子どもの社会性に及ぼす影響について一定の知見を確立していくことが急務と言えよう。そこで、本プロジェクトの第3回調査において、子どもの社会性を測定する項目を追加し、メディア接触との関連について分析を行った。

2. 尺度作成

幼児の社会性を測定する尺度にはさまざまなものがあるが、その多くが子ども同士の相互作用を日常的に観察できる教師（保育者）を評定者としている。そのため、親が評定者となった場合、答えにくい項目も少なくない。「津守・稲毛式 乳幼児精神発達質問紙」は親が評定者となっているが、年齢ごとに項目が異なっているため、異年齢間での比較が難しい。本プロジェクトでは、社会性の発達とメディア接触との関連を見るのが主目的であり、その目的からするとできるだけ異年齢間で使える尺度が望ましいことになる。そのため、まず、幼児（2歳以上）の社会性を測定していると思われる尺度を収集し、各尺度を構成する項目をKJ法によりグルーピングした。

次に、多くの尺度に共通して見られる項目を優先して選び、親が評定しやすい表現に改めた。最終的に、表1に見られる15項目を用いることにした。もともなった尺度・項目は以下の通りである^{注1}。

1. 「津守・稲毛式 乳幼児精神発達質問紙（1～3歳）」のうち、社会性の発達に関する項目（大日本図書）
2. 「新版 S-M社会生活能力検査」のうち、Ⅱ（2歳0ヶ月～3歳5ヶ月）の集団参加・自己統制に関する項目（日本文化科学社）
3. 「社会的スキルアセスメント」（畠山・畠山・山崎，2003）
4. 「自己制御機能」（水野・本城，1998）^{注2}
5. 「発達期待」（柏木，1988）のうち、社会的スキル・言語的自己主張に関する項目
6. SCBE尺度（Social Competence and Behavior Evaluation Inventory）（LaFreniere, Dumas, 1996）のうち、社交性（social competence）と不安（anxiety-withdrawal）に関する項目

3. 方法

調査時期：平成17年1月

調査方法：郵送によるアンケート

調査対象：本調査の参加者は、平成14年2月～7月に川崎市で生まれた乳児（調査時2歳）1250家庭である。今回の解析の一部は、調査開始時点（Time1）から3時点目（Time3）までの経年調査に参加した687家庭の母親と父親を対象とした。

4. 結果

(1) 「協調性・共感性」尺度

表1に社会性に関する各項目の平均値と標準偏差を示す。性差について検討したところ、項目6, 7, 10, 11では女の子のほうが得点が有意に高く（順に、 $t=-2.56$, $p<.05$ ； $t=-2.72$, $p<.01$ ； $t=-5.31$, $p<.01$ ； $t=-7.39$, $p<.01$ ）、項目8では男の子のほうが高くなっていた（ $t=-4.44$, $p<.01$ ）。保育施設の利用との関連では、項目1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 15において、利用している群のほうがしていない群よりも高くなっていた（順に、 $t=3.03$, $p<.01$ ； $t=4.81$, $p<.01$ ； $t=4.29$,

注1 本来であれば、社会性の定義を厳密に既定した上で、尺度作成にあたるべきであったが、時間的な制約もあり、社会性に関して使用頻度が多いと思われる尺度を選定し、そこから項目を抽出するという方法をとった。

注2 本尺度は、柏木（1998）と西野（1990）を参考にして作られている。

p<.01 ; t=2.30, p<.05 ; t=3.83, p<.01 ; t=8.01, p<.01 ; t=3.17, p<.01 ; t=3.31, p<.01 ; t=4.28, p<.01 ; t=4.85, p<.01)。逆に、項目13, 14においては、保育施設を利用していない群のほうが高くなっていた（順に、t=-2.91, p<.01 ; t=-2.82, p<.01)。

表1 社会性に関する項目の平均値・SD

番号	項目	平均値	SD
1	遊びの中で自分の順番を待てる	3.63	1.03
2	欲しいものがあったても、言い聞かせれば、がまんして待つ	3.50	1.08
3	お友だちと協力して、仲良く遊ぶ	3.59	0.95
4	お友だちと意見が合わないとき、うまく解決策を見つけられる	2.62	0.97
5	自分のおもちゃをお友だちにも貸してあげて、一緒に遊べる	3.61	0.97
6	お友だちが困っていること(気持ち)がわかる	3.32	1.04
7	グループで活動するとき、他の子どもと協力できる	3.17	1.05
8	他の子どもをぶつたりたたいたりする	2.42	1.29
9	自分の考えを他の人たちにちゃんと主張できる	3.43	1.17
10	なんでもひとりでやりたがる	4.04	0.92
11	年下の子どもの世話をやきたがる	2.99	1.30
12	きまったお手伝いができる(おもちゃのお片付けなど)	3.80	1.00
13	引っ込み思案で、他の子どもが遊んでいる中に入れたい	2.33	1.22
14	他の子どもが大勢いるときは不安そうにしている	2.41	1.26
15	お友だちが困っているときに、なぐさめたり助けたりする	3.38	1.11

これらの15項目に対し、主成分分析による因子分析を行った。固有値が1以上となったのは第3主成分までであり、その減衰は4.20、2.00、1.31となっていた。それぞれの因子負荷量を表2に示す。第一主成分に高く(.50以上)負荷している8項目(1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 15)のうち、「2. 欲しいものがあったても、言い聞かせれば、がまんして待つ」以外は、いずれも仲間関係における協調性・共感性を表していると考えられる。そこで、この7項目の α 係数を計算したところ、 $\alpha = .82$ となった。内的一貫性も十分に高かったことから、以下の分析では、この7項目の合計得点を「協調性・共感性」尺度の指標として用いることにした。なお、それ以外の項目については、

表2 各項目の因子負荷量

項目番号	第1主成分	第2主成分	第3主成分
1	0.56	0.40	-0.24
2	0.56	0.35	-0.16
3	0.75	0.07	-0.20
4	0.68	0.20	-0.09
5	0.64	0.24	-0.19
6	0.67	0.05	0.13
7	0.76	0.00	-0.02
8	-0.01	-0.47	0.25
9	0.43	-0.33	0.35
10	0.28	-0.22	0.45
11	0.43	-0.12	0.48
12	0.40	0.11	0.32
13	-0.30	0.74	0.41
14	-0.22	0.74	0.45
15	0.61	-0.32	0.17

まとまった因子とみなすのが難しかったことから、今回の分析からは除外した。

(2) 協調性・共感性尺度とメディア接触との関連

2歳児の協調性・共感性尺度得点を表3に示す。男女別に見ると、女子のほうが得点が高くなっていた ($t=-2.48, p<.05$)。

表3 協調性・共感性尺度の平均値とSD

	N	平均値	SD
全体	1074	23.30	4.94
男子	564	22.95	5.11
女子	510	23.69	4.71

保育施設の利用別に見ると、利用している群 ($M=25.06, SD=4.80$) のほうが、利用していない群 ($M=22.80, SD=4.85$) よりも得点が高くなっていた ($t=6.37, p<.01$)。また、月齢とは弱い正の相関 ($r=.13^{**}$)、出生順番とはごく弱い正の相関 ($r=.07^*$) が見られた。母親変数との関連では、暖かい養育態度とは正の相関 ($r=.20^{**}$)、抑うつ傾向とは負の相関 ($r=-.16^{**}$) が見られた。そのほか、友人の数 ($r=.23^{**}$)、友人と遊ぶ回数 ($r=.21^{**}$) との間にも弱い正の相関が認められた。協調性・共感性尺度得点とメディア接触量との相関をとったところ、表4に見られるように、ゲーム接触量、ニュース番組接触量、アニメ番組接触量、幼児向け2接触量を除き、メディア接触量とは、弱いながらすべて負の有意な相関が見られた。しかしながら、性別、月齢、出生順番、保育施設の利用の有無、母親の暖かい養育態度、母親の抑うつ傾向をコントロールした偏相関を求めると、有意な相関は全く見られなくなり、両者の相関は見かけの相関に過ぎないことが示された。

表4 協調性・共感性とメディア別接触量との単純相関

テレビ接触量	ビデオ接触量	ゲーム接触量	テレビ・ビデオ接触量	映像接触量
-0.10 **	-0.08 *	0.04	-0.12 **	-0.11 **
教育番組接触量	ニュース番組接触量	バラエティ番組接触量	アニメ番組接触量	ドラマ・映画接触量
-0.09 **	-0.05	-0.07 *	0.01	-0.06 *
子ども番組接触量	子ども向け教育番組接触量	幼児向け1接触量	幼児向け2接触量	幼児向け番組接触量
-0.09 **	-0.09 **	-0.08 *	-0.06	-0.08 *

** $p<.01$ * $p<.05$

次に、ジャンルごとの視聴量（ながら視聴と専念視聴を足したもの）との相関をとったところ、「子ども向け教育・講座番組視聴量」とのみ弱い負の相関が見られた ($r=-.08^{**}$)。しかしながら、上記と同様に、性別、月齢、出生順番、保育施設の利用の有無、母親の暖かい養育態度、母親の抑うつ傾向をコントロールすると、有意な相関は見られなくなった。

(3) 子どもの「協調性・共感性」への影響要因の検討

子どもの「協調性・共感性」尺度を従属変数とする階層重回帰分析を行った。表5に示すように、説明変数（影響要因と仮定）として用意したのは6ブロック（カテゴリー）、19変数である。第1ブロックは月齢、性別などの属性、第2ブロックは保育施設の利用有無や友人と遊ぶ回数、母親によるマネジメントなどの仲間との接触経験に関する変数、第3ブロックはテレビ接触量や外遊び時間などの一週間の平均時間（すべてTime 2とTime 3の合計時間）、第4ブロックは子どもの気質特性、第5ブロックは母親の養育態度（Parker, Tupling, & Brown, 1979; 北村, 1998）と母親の子どもへの対人的信頼感（酒井, 2005）の2変数、第6ブロックは母親の養育態度（Parkerら, 1979; 北村, 1998）と母親の子どもへの対人的信頼感（酒井, 2005）の2変数であった。

ここで、子どもの気質（temperament）とは、遺伝子との関連が予想される子どもの生得的な行動特徴の個人差のことである。この気質特性のカテゴリーについてはいくつかの考え方があり、それに合わせて測定尺度も複数存在するが（例えばRothbart, 1981）、今回はCloningerら（1993）が開発したTCI（Temperament and Character Inventory）尺度（木島・斉藤ら, 1996）の気質に関する部分を使用することにした。彼らは、子どもの気質として大きく4つのカテゴリーを用意している。そのひとつは、「新奇性追求」と呼ばれるものである。この気質が強い個人は、好奇心旺盛、衝動的などの特徴が認められる。「報酬依存」は、他者からの報酬（褒められたりなぐさめられたり、賞をもらったりなど）に影響されやすいかどうかを示す指標であり、他者への親和欲求や感動しやすさなどの個人差に関わるものである。「損害回避」の強い個人は、何事にも慎重で内向的なタイプであり、「固執」気質の高い個人は、辛抱強く、こだわりが強いタイプであるとされる。

表5は、「協調性・共感性」尺度得点とそれぞれの変数得点との相関、ならびに重回帰分析の結果を示したものである。これを見ると、まず「協調性・共感性」との間に有意な関連が認められたのは、属性変数である「月齢（ $r=.13$ ）」、「性別（ $r=.08$ ）」、「出生順番（ $r=.07$ ）」、仲間との接触経験量変数である「保育施設利用の有無（ $r=.19$ ）」、「友人の数（ $r=.23$ ）」、「友人と遊ぶ回数（ $r=.21$ ）」、生活時間変数である「テレビ接触量（ $r=-.11$ ）」、「ビデオ接触量（ $r=-.07$ ）」、「外遊び時間（ $r=.10$ ）」、気質的特性変数である「新奇性追求（ $r=-.15$ ）」、「損害回避（ $r=-.08$ ）」、「持続（ $r=.21$ ）」、母親との関係性変数である「母親が子に抱く信頼感（ $r=.20$ ）」と「母親の養育態度の暖かさ（ $r=.19$ ）」、父親との関係性変数である「父親が子に抱く信頼感（ $r=.10$ ）」と「父親の養育態度の暖かさ（ $r=.11$ ）」であった。

つぎに、説明変数群（Block）を投入するごとの説明率（ R^2 ）の変化量に注目すると、Block3（生活時間）とBlock6（父親との関係性）を投入したときにだけ説明率が有意に上がらないという結果が認められた。また、それぞれの説明変数に注目すると、各説明変数間の相互影響性を考慮した上で「協調性・共感性」への影響を示す β 値から、有意な関連を示していたのは「月齢（ $\beta=.08$ ）」、「出生順番（ $\beta=.13$ ）」、「保育施設の利用有無（ $\beta=-.09$ ）」、「友人の数（ $\beta=.19$ ）」、「損害回避（ $\beta=-.08$ ）」、「持続（ $\beta=.15$ ）」、「母親が子に抱く信頼感（ $\beta=.15$ ）」であった。

表5 協調性・共感性の階層重回帰分析

	相関係数	子どもの共感・協調性		
		β	調整済み R^2	R^2 変化量
Block 1 月齢	.13**	.08*	.02**	.03**
性別	.08*	.05		
出生順番	.07*	.13**		
Block 2 保育施設利用の有無	.19**	.09*	.08**	.06**
友人の数	.23**	.19**		
友人と遊ぶ回数	.21**	-.03		
母親による友人関係のマネージメント	.03	-.03		
Block 3 テレビ接触量(time2+3)	-.11**	-.02	.08**	.01
ビデオ接触量(time2+3)	-.07**	-.02		
外遊び時間(time2+3)	.10**	.05		
中遊び時間(time2+3)	-.04	-.03		
Block 4 気質:新奇性追求(0歳時)	-.15**	-.04	.12**	.04**
気質:報酬依存(0歳時)	.04	-.01		
気質:損害回避(0歳時)	-.08**	-.08*		
気質:持続(0歳時)	.21**	.15**		
Block 5 母親が子に抱く信頼感	.20**	.15**	.15**	.03**
母親の養育態度の温かさ	.19**	.06		
Block 6 父親が子に抱く信頼感	.10**	.06	.15**	.01
父親の養育態度の温かさ	.11**	.03		

5. 考察

以上、本節では、乳児期の社会性の一側面である仲間への「協調性・共感性」を測定する尺度の開発を行った。作成された尺度を用いた解析から、仲間への「協調性・共感性」得点は、男子よりも女子の方に、また月齢の高い子どもほど高いことが示された。こうした「協調性・共感性」は、現在の生活環境の違いによっても異なっていた。すなわち、保育施設を経験している子どものほうが経験していない子どもよりも高く、養育態度が暖かくて抑うつ傾向が低い母親の子どもの方が、そうでない母親の子どもよりも協調性・共感性が高いことが示されていた。

つぎに、「協調性・共感性」とメディア接触の関連について検討したところでは、全般的に弱い負の相関が見られたものの、子どもの月齢や保育施設利用の有無などの変数による影響を考慮した場合には、有意な相関は見られなくなった。また、表5を見ると、2歳時点における「協調性・共感性」には、子どもの月齢が高いことや出生順番が遅いなどのほかに、子どもがそうした仲間と実際に接する機会が多いかどうか重要なようである。保育施設の利用は子どもが同世代の仲間と接する機会を増やし、社会性の発達を促すものと考えられよう。さらに、今回は気質特性のうち「損害回避」と「持続」による影響が認められていた。この結果を子どもの友人との遊びの場面で考えてみると、子どもが慎重すぎる場合には仲間と一緒に遊ぶことに中々踏み出せず、辛抱強い気質の子どもは遊ぶ順番を待つことができることから、おもちゃの貸し借りなどのいざこざが少ないために良好な関係性が築けると想像できよう。最後に、「母親が子に抱く信頼感」が子どもの「共感性・協調性」に影響を与えることについては、Bowlby (1969) の乳幼児期の愛着関係に関する理論や内的作業モデル理論を裏付ける結果といえるかもしれない。母親との間

に十分な信頼関係のある子どもは、母親を安全基地として自分の世界を広げる探索活動に取り組むことができる。いつでも母親が守ってくれる安心感が、彼らが仲間関係という新しい対人世界の中で自由に振舞うことを可能としてくれるのである。

6. 引用文献

- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss: Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. 1993 A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- 畠山美穂・畠山寛・山崎晃 (2003) 仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか ―日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して― *保育学研究*, 41, 20-28.
- 柏木恵子 (1988) 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 木島伸彦・斉藤令衣ら 1996 Cloningerの気質と性格の7次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) *精神科診断学*, 7, 379-399
- 木村文香 (2003) テレビゲームと社会的不適応 坂元章 (編) *メディアと人間の発達* 学文社 Pp. 115-124.
- 北村俊則 1988 精神症状測定の理論と実際 第2版 ―評価尺度、質問票、面接基準の方法論的考察― 海鳴社
- LaFreniere, P. J. & Dumas, J. E. (1996) Social competence and behavior evaluation in children ages 3 to 6 years : The short form (SCBE-30). *Psychological Assessment*, 8, 369-377.
- 西野泰広 (1990) 幼児の自己制御機能と母親のしつけタイプ *発達心理学研究*, 1, 49-58.
- 水野里恵・本城秀次 (1998) 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連 *発達心理学研究*, 9, 131-141.
- 向田久美子 (2003) *メディアと乳幼児* 坂元章 (編) *メディアと人間の発達* 学文社 Pp. 2-22.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. 1979 A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.
- 酒井厚 2005 対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ 重要な他者間での信頼すること・信頼されること 川島書店
- 津守真・稲毛教子 (1995) 増補 乳幼児精神発達診断法 0才から3才まで 大日本図書